

学級経営に生きる体育授業の提案 ～肯定的な人間関係づくりを通じて～

浦野 康人 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)
指導教員 柴田 俊和

キーワード：学級経営 体育授業 肯定的人間関係 自己肯定感

1. 緒言

平成20年8月小学校学習指導要領では21世紀は「知識基盤社会」の時代であるとして「生きる力」が必要とされている。筆者は自己肯定感を高める教育から児童が「自ら考えて行動できる力」を身につけられる指導法を模索していた。

研究の動機は体育授業研究の松井直樹「私と彼女と学級の跳び箱運動～体育授業と学級経営の実践から～」(2008)にある体育を活かした学級経営のような内容を、教師として生涯研究し続けて行きたいと考えたからである。

研究目的は「学級経営に生きる体育授業の指導論を提案すること」である。

2. 研究方法

- ①文献調査：先行研究などを基に学級経営に生きる体育授業の指導論を考察する。
- ②アンケート調査：教職員がどのような意識で学級経営や体育授業に取り組んでいるのか実態を明確にし、指導論を考察する。

3. 結果と考察

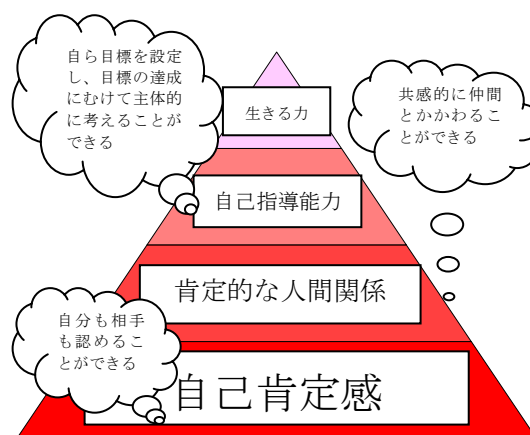
文献調査の結果から、現代の児童は勝利第1主義のスポーツ環境で育ち、極度に失敗を恐れていることが明らかになった。加えて、習い事に追われて何事にも受動的な姿勢になり、自己肯定感も低い。これらの改善には、肯定的な人間関係を促進する体育授業が必要である。アンケート調査結果から、教師が良い学級経営を行うには第1に学習規律、第2に肯定的な人間関係を必要としていることが明らかになった。また、自己決定や自己表現、小さな成功体験を蓄積することで、児童の主体性や自己肯定感を促す。その課程で児童の

肯定的な人間関係、自己指導能力、生きる力を育成し学級経営に繋げる。

考察の結果、児童の自己肯定感を生きる力へと変容させることで、体育授業が学級経営や学習規律の確立により影響を与えると推測された。

4. まとめ

図1 学級経営に生きる体育授業



学級経営に生きる体育授業において、図1で示す通り、「児童一人ひとりの自己肯定感を基盤に肯定的な人間関係を築き、自己指導能力の育成から生きる力につなげる指導」が必要である。学級経営に生きる体育授業として、①失敗できる環境づくり、②自己決定・自己表現の場づくり、③教師と児童及び児童同士の肯定的なかかわりが学習活動に含まれている指導でなければならない。

参考文献

大阪教育文化センター「子ども調査」研究会編(1992) 21世紀をになう子どもたち 京都法政出版